

衣川一山本旭采・絃旭瀟▼堅田落一丸尾旭宝
 ▼秋風故郷の山一榊本旭風・絃旭昇、旭暢、
 旭将、旭楓・立方▼大物の浦一河野旭香・絃
 旭操▼舞扇鶴ヶ岡一青柳旭鶴、鈴木旭鶴鈴、
 別所旭鶴美・絃旭八千代▼月に偲ぶ一秋元旭
 晨・絃旭操、旭晴、旭璋・立方▼壇の浦一三
 脇旭香・絃旭香▼大楠公一宮垣旭璋。

ラヂオ琵琶放送

六月八日(内)午後三時十分NHK・F.M.原
 島旭粧女史一大物の浦。

栗本天芳(實一)氏 五月二十九日老衰
 のため逝去、享年九十二。葬儀同三十一日。
 明治四十二年頃から安田玉翠氏、児玉天南翁
 に師事し薩摩琵琶の神韻を追求すること六十
 年、四明会を主宰し関西に於ける斯界の重鎮
 で琵琶楽発展につくされた功績は大きい。故
 人生前の愛器江月は名工故吉岡氏作、撓面の
 高時絵澤陽江は巨匠瀬川晁流作の逸品である。
 謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。(京都
 市中京区河原町通三条上ル東入ル)。

○：京都琵琶協会七月例会 七月一日(日)昼一
 時本部平井春嶺氏宅。
 ○：筑前琵琶紅会演奏会 七月二日(日)正午東
 京日本橋三越劇場。押田旭窃会長以下多数

(予告)

○：東西合同夏季一泊弾交會 七月三十日(日)
 屋一時から三十一日(日)正午まで浜松市入野
 町四六八六老人保養所西遠荘。四明会、正
 絃会、鶴絃会共催。会費一泊三食付四千五
 百元(酒肴茶菓子等一切を含む)。
 ○：琵琶を奏しむ会 八月六日(日)昼一時神戸
 市東灘区御影中町一ノ一四ノ一五田中敷水
 氏宅(電話851-1263番) 参加歓迎。
 ○：琵琶三美会演奏会 八月十九日(日)正午京
 都市烏丸御池上ル京都商工会議所ホール。
 会員の外山崎旭萃、鈴木流泉、久徳旭蘭、
 佐藤旭天紅各師等ゲスト出演(会長矢吹旭
 美津女史)。

○：関西新進琵琶演奏会 七月十六日(日)昼十
 二時半大阪北区天神橋二丁目朝陽会館、主
 催吟水会(会長小川吟水氏)。賛助紙水会、
 三浦蓮水会、木村蓮水会、欽水会、絃声会、
 吟水会々員の外中山鳳水、木下皇水、尾山
 好水、安江弘水、江原錦和各氏ゲスト出演。

○：恒例京都祇園八坂神社祭礼奉納演奏会
 七月二十三日(日)夕五時同神社能楽堂、協賛
 京都琵琶協会。(会長平井春嶺氏)。

○：日本琵琶楽協会コンクール 八月二十日
 (日)昼十一時東京日本橋第一証券ホール。出
 場資格一協会の推せん者、一曲七分間、
 参加料六千円、申込み締切七月十五日。

琵琶
 機関紙

京

絃

第二八九号 京 絃 社

戦国時代の女性 (四)



はくす

「白拍子(しらびよりし)」は、平安時
 代末期に鼓を伴奏とする、今様風の歌謡を
 指すものであったが、やがてこれに舞を伴
 うことが流行して歌舞の一種を云うようにな
 り、更に、白拍子を舞う遊女を「白拍子」
 と称し、後には遊女の異名となったのであ
 る。

鳥羽天皇の時代(一一一〇年)頃、二人
 の女が直垂(ひたたれ)立鳥帽子(たてえ
 ぼし)白鞘巻の太刀姿で舞ったのが白拍子
 の起源とされたが、後に白色水干(すいか
 ん)に袴の男姿で舞ったので、白拍子と称
 したとも云われる。女芸人が男装して客を
 楽しませるといふ風習は、白拍子に始まっ
 たわけではなく、平安時代の大道芸人傀儡
 女(くぐつめ)は、さまざまな衣裳をつけ
 物まねを主として演じた。

これに対して、白拍子は舞を専らとした
 雑芸として民間にひろまり、やがて貴族た

ちにも愛好されるようになった。然し朝廷
 の式楽としては唐の伎楽を移した雅楽があ
 り、官女の舞いも琵琶や琴に和して舞う伝
 統的な舞楽があったから、白拍子が殿上人
 に召されることは異例であった。ただ武家
 出身の貴族、たとえば平清盛の別邸に白拍
 子が起居したり、戦場の慰安婦として白拍
 子が武將の陣營を訪づれるということは稀
 ではなかった。

祇王と仏

祇王は京でも屈指の白拍子の名手であった。
 清盛はこれを聞くと西八条の別邸に召し祇王
 を独占した。祇王は清盛に愛されて幸福な日
 を送っている、やがて三年後に仏といふ
 白拍子の名が高くなった。

私は平家の太政入道殿に召されて、祇王と
 伎を競ってみたいと思ひ西八条を訪ねたが、
 清盛はこれを追い返そうとした。これを取り

あ

降りみ降らずみの鬱陶しい梅雨期
 の毎日、愛読者の皆さまお変わりござ
 いませんか、御伺い申し上げます●
 四月から五月六月と季候のよい時機
 に例年通り各地で盛んな琵琶行事の華麗な絵
 巻が繰り広げられ御同慶至極●六月四日の京
 都琵琶協会演奏会で休憩時間に楽屋から偶々
 出て来て廊下で出逢った筆者をつかまえて、
 会のたび毎に聴きに來られるという初老の熱
 心な琵琶ファンの方からこんな話を聞かされ
 た●時間の関係もあるのだろうが演奏され
 る名文の琵琶歌詞を中抜きにして、時には辻
 褌の合わぬ語り物にしてしまふのは誠に物足
 りない●時間が足りなければ奏者の人数を制
 限するとか、一曲を上下に分けて二人で分奏
 するなどの方法で全曲を心ゆくまで聴かせて
 貰えぬものだろうか●我々琵琶人にとって
 は嬉しい話で同じような希望は折りに触れ聞
 く言葉であるトクは喰いたし命は惜しし
 詳しくはよく考へべし●本号は記事輯録のた
 め貴重な二、三の御寄稿を次号廻しとするの
 やむなきに至った。御執筆者に深くお詫び申
 し上げる●八月号登載の暑中交礼のお申し込
 み、どうぞよろしく。

昭和五十三年七月一日発行(非売品)
 編集者 植村 真水
 発行者 高槻市津之江北町一ノ二番
 〒569 電話 〇七二六(七三)六〇五一番

なしたのが祇王である。清盛はしづぶ仏の
 舞を見物したが、その美しさに心を奪われそ
 のまま邸にとどまるよう仏に命じた。

私は祇王に申訳ないと思ひ辞退した。清盛
 は、では祇王に暇を出そう、と祇王を追い出
 した。その後、祇王を呼び出して、仏を慰め
 るために仏の前で舞へとの無理難題。祇王は
 泣く泣くその屈辱に一度は耐えたが、遂に二
 十一才の若さで髪をおろし、嵯峨野の奥に庵
 をむすんで念仏三昧の明け暮れを送った。
 ところがその翌年、祇王の庵を叩く者があ
 り、誰かと思えば僅か十七才で「娑婆の栄華
 は夢の夢、いつか我が身も」と、無常を感じ
 て尼となった仏御前であった。

平家物語のこの一章で注目すべき点は、物
 の哀れを解する平安風の優美な祇王と、新時
 代積極的タイプで、自ら貴族の屋敷へ乗り込
 み、己が芸を示そうとした仏との対照である。
 即ち、仏が西八条に己れを売込みに来たと
 き、清盛が謁見をこぼんだのに対して祇王が
 とりなしをするのは、同じ白拍子として仏が
 下げなく掃されるのが、どんなに辛かろうと
 の優しい同情によるものであるが、同時に芸
 能人同志の同族意識の連帯感情が働いていた
 とも思える。しかも、それが自分への清盛の
 寵愛を奪われる動機になろうとも気付かない
 ところから彼女の哀れさが漂う。しかし清盛
 から追立てられると、三年住み慣れた部屋を
 掃き清め、泣く泣く障子に「萌えいづるも枯
 るるも同じ野への草いづれか秋にあはで果つ

ベキ」の一首を書き残していくあたり、また、清盛から仏を慰めよとの使いが来て、再び西八条を訪れ清盛や仏の前で「仏も昔は凡夫なり、われらも遂には仏なり、いづれも仏性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ」と、即興の今様をうたうあたり、ゆかしき中にも小さな抵抗と仏への警告がこめられていて、いかにも思慮深い一面を感じさせるが、これとても、いかに当時の白拍子が当意即妙に、酒席などで作詞作曲をやつてのける文楽的、音楽的教養に富んでいたかを証するに足る。さて、祇王の出家、次いで仏のそれは何を物語っているか。それは彼女らが此の世をはかなんだり、栄華の夢を自発的に捨てる心境に到達したことを意味するものであるが、ひるがえって考えるならば、何でも己れの自由が押し通せると思っている主権者に対する、白拍子階級の痛烈な挑戦でもあったのである。

(此項未完)



我が道

六十五年

西郷 天風

この日「錦の御旗」を演奏することになつては、琵琶を手にして余興係の指図を待っている、あれは池田公爵夫人の宮様

です。ひそひそ話が耳にはいつた。舞台の方に眼をやれば、付添いらしい人々に守られて舞台の上に進まれるのは、白鉢巻にタスキ十字もおごそかに、大薙刀を小脇に召されたその神々(こうごう)しい御姿は、畏くも元岡山藩主池田公爵家に御降下あらせられた内親王様で、特別の思召しにより御得意の「薙刀の型」を御披露遊ばされ、この新春の祝宴に興を添え給うたのであった。武術の型といえば、剣道、居合道をはじめ陶物斬り、或いは槍術の型と、斯道のつどい等で度々見る機会を得たが、「薙刀」はこの時が始めてであり、それも、皇族にあらせられる内親王様手練の舞姿を身近に拝し奉るばかりでなく、畏れ多くも御香気消えやらぬ舞台の殿がりを承つたことは、私生涯を通じて光栄これに過ぎたるはなく、感激にひたりながら携を取る手も、無我無中だった。

その日から旬日後、つまり正月十五日には再びこの道場で、荒木閣下の発議による詩吟大会が催され、その時も閣下からの招待があり、答礼をかねて参上すれば、演壇の後方には上下約三メートル、横五メートル余の、日本を中央にした世界大地図を貼下げ、定刻早荒木閣下自ら開会を宣言。引続き爾後毎月十五日を期し開催する予定につき、諸君は万

障繰合せ参加の上、芸の巧拙、流派の如何を問わず、この壇上から堂々と詩を吟じ、日本男子の意気を天下に高揚せられんことを歓迎する。尚私は毎回、最初の十五分間を頂いて、時局柄「世界の大勢」に眼を注ぎ、その動向を諸君と共に見守るべく、此の地図を用意しました。

その第一講として今日は、この世界地図の左端に見る大國、ロシア帝國十四世頃頃から初めるつもりです。と前置きして、ピートル大帝の偉業など、我々にも面白く解説された事を記憶する。

思いおせば、大正と昭和の二回に亘り、ワシントンとロンドンで開かれた国際會議に於て、日本は國土の広さに比し、その軍備が膨大に過ぎるといふ理由で、英米の五、五に對し、日本は三の割合が妥当ならずやと強制され、このままでは一朝事ある時、日本の國防力は全くゼロに等しい状態となつた。

そこで止むを得ず、衛星國建設に国力を傾けて、漸く出来たのが彼の滿洲國だった。

しかしこれも、國際聯盟會議の結果は十三對一という予想通りの敗北となり、やがて英米側では洋上にABCラインを張って、經濟封鎖の暴挙に出たのであった。

ここに至つて民心の動搖は只ならず、愛國黨の赤尾敏氏は当時日暮里の金松亭に於ける私の琵琶会に顔を見せていたが、彼の時局講演会に琵琶出演方を求めて来た。時局講演の尖は琵琶の一曲も亦面白からんと協力を約

し、都内各区の催しには毎回必ず出演したが、いづれも「ソ連討つべし」のスローガンに徹してはいた。

ソ連は、日本と支那との戦争誘発に策をめぐらしつつある、と云うのであり、又一方には、某陸軍士官による打倒英國のスローガンで、英國は日支間の戦争誘発に謀略をめぐらしている、今にして正さざれば悔を後日に残すであろう。と両者互いに熱弁をふるっていたが、双方とも当局から差止めを命ぜられてしまった。

丁度その頃だった。日暮里には金松亭と称する席亭があり、この町に移つて以来、私はこの金松亭を根城として毎月演奏会を続けて居り、片田舎然たる町の風格には不似合のすぐれた大演奏会との風評が自慢だった。出演者も、薩摩絃風、吉野絃月、小田原國尊、時には浜田広洋師等、大先輩の至芸に接する機会さえあるのだった。

この日暮里には「御行の松」と云う旧跡があり、その境内近く山口速水君が琵琶教授の看板を出していた、錦心流では近づく機会もなかったが、或るとき誰かの話で速水君の妻女が水戸の生まれと知り、訪ねたことから懇意となつた次第で、その後、常陸丸生存者後援の会に、はるばる水戸まで出演を頼んだことは既に述べた通りで、それ以来交遊は絶えず、全国放送琵琶大会後の私が全国琵琶行脚の計画を話した時、速水君も樺太の絃友に招かれ、遠方旅行に経験を持たぬ彼は私に同行

を望むやにみえたが、当時琵琶のケース製作に夢中だった私が再び訪ねた時、彼は青森まで迎いに出来た絃友にせかれて既に樺太へ出発し、不日到着の筈のことだった。

それから数日後、北海道の旭川に画友の高橋北州氏を訪ねた私は、一と昔ぶりでこの街の発展ぶりに驚きながら、某レストラン階上に於ける歓迎会で、相も変らぬ十数名の友情を前に、数曲の琵琶を奏しむことが出来た。



高山右近大名

志賀 一

NHKテレビで放映中の大河ドラマ「黄金の日」でクローズアップされた高槻城主高山右近とは如何なる人物か。

高山氏は、もともと摂津高山荘(現在の大阪府豊能町高山)の出身といわれている。右近に天文二十二年(一五五三)高山飛騨守の長男として、大阪・三島郡清溪村大字高山に生まれた。当時飛騨守は大和の沢城主としており、布教に来たバテレン(神父)からイエスの教えを聞いて、ダリオ飛騨守と名乗った。以後高山一族はキリスト教に改宗し、右近も十一才のとき洗礼を受けて、ジュスト(義人の意)右近と名乗るようになった。

天正元年(一五七三)、二十一才で高槻城主となつた右近は、劍の達人で、茶道は千利休について奥儀をきわめた人格者であるが、布教活動の第一歩として、城内に木造の大天主教會堂を建設した。熱心なキリシタン城主の影響で領民は次々とキリスト教に改宗し、天正九年には人口二万五千人のうち、一万八千人がキリシタンになつたといふ。

右近はまた、一夫一婦制を守り、朝夕のミサを怠らず、合戦で死んだ家臣の子弟に父の禄高そのままを与えるなど、当時としては異例の善政をしき、領民からあがめられた。しかし、戦国時代とあつて平和なときばかりではなく、天正六年十月、摂津守荒木村重が織田信長に反抗し、主従関係にあつた右近に服従の誓約を求めて、当時四才の一子と、姉妹二人を人質に取られた。

智将右近の善戦で、信長は村重攻略に手をやき、キリシタン禁止令を出すと脅迫した。右近は悩み抜いたあげく、キリシタンを守るため人質の犠牲を覚悟で高槻城を開城した。カナメの高槻城が落ちては如何ともすることが出来ず、村重は遂に信長に降伏した。

それから二年半の後「本能寺の変」がおき、やがて天下分け目の山崎合戦となつて、明智光秀討伐には、右近が先陣を切って光秀軍を粉砕するなどの智将ぶりを発揮し、その功名を秀吉に認められて四千石を加増された。

更に、秀吉の四国出兵などでの功績で、天正十三年八月、七万石の高槻城主から十二万

石の明石城主に栄転し、十二年間親しんだ高槻をあとにしたのであるが、大勢の住民は右近を慕って同行、右近の手柄をあらわすエピソードとして語り継がれている。

ところが、天正十五年八月、キリスト教は国内統一の妨げになると見た秀吉は、九州からの帰途博多でキリシタン禁止令を發布したため、多くのキリシタン大名は改宗したが、右近は頑として聞き入れず、十二万石の大名の地位を捨てて小西行長の住む小豆島へ逃避し、その後、親友の加賀藩主前田利家のもとへ逃れるなどして、殉教の生活を送った。

秀吉のあと天下を取った徳川家康も、慶長十七年(一六一二)、キリシタン禁止令を發布して各地の教会を破壊するなどキリスト教徒を弾圧し、更に慶長十九年一月には、キリシタン国外大追放の命令を出し、同年二月十四日右近のもとへも追放令が届いた。時に右近六十才。

諸大名はしきりに棄宗をすすめたが、右近はキッパリと断り、同年十一月八日イスパニアの老朽船に乗り、飢えと病気に悩まされながら、一ヶ月を費してようやくマニラに到着し、そこでフィリピン諸島長官ドン・ファン・デ・シルバから国賓として手厚く迎えられた。しかし、長い船旅の疲れからか、わづか四十日で病いに倒れ、元和元年(一六一五)二月五日、六十三才の破乱に満ちた生涯を終えたのである。

高山右近の立像は、現在高槻市のカトリック教会の前庭にあり、白色のイタリア大理石でつくられ、右近三百五十年祭(一九六五年三月二十一日)に、ローマのクラレチアヌ総長が奇贈されたのであるが、キリシタン信仰の故に日本を追放され、マニラでその香り高い殉教者の生涯を閉じた右近の徳を偲び、これを記念するため右近ゆかりの地、旧日本人居留地マニラのブラザ・テラオに、三年半の長年月と巨費を投じて、昨年完成した美事な右近立像の除幕式が同十一月十七日、比国朝野の名士二百五十名、並びに日本からも西島高槻市長その他六十二名が参列して盛大に挙行された。



西南戦争異聞 増田宗太郎らの奮闘

旭城

明治十年に起った西南戦争が、わが国の歴史に残る有名な戦史であったのは今更いうまでもない。

明治二年六月、全国各藩より版籍奉還(各藩領有の土地と人民を朝廷にお返しする運動)が行われたが、それは名目上だけのことで、藩主が知藩事となって中央政府より任命された形式をとったものの、内容的には封建制度は温存されたままであった。

この諸藩を事実的に廃止して、府県制度の中央集権的近代国家を樹立しなければ、何の爲めの明治維新かわからない。

一方今度の「廃藩置県」も、前もって旧藩主・藩士たちに何の相談もなく突然政府の命令で、在京五十六藩の知藩事たちを皇居小御所の広間に召集し、即時全知藩事を免官して中央より府知事・県令を任命し、中央集権的統治を行うことになり、ここに封建制度は名実ともに廃止され、近代国家へと脱皮した。

この廃藩置県が生まれて、年数も僅かの明治十年といえは、まだまだ旧藩時代の意識が大分県の人たちには根強く残っていた。従って西南戦争に対する反応、対処の仕方とも全県一致という訳にはいかず、旧藩ごとにさまざま

夏季特別号発行について

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富な記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと有じます。

までであった。

まづ、西南戦争に強い反応を示したのは、旧中津藩の下級武士たちであった。豊前中津は青の洞門で有名な耶馬溪への表玄関であった。豊後大分の西北端に位置し、豊前平野のほぼ中央で、豊前米の豊庫として有名であり、山国川河口の三角州に発達し、かつては扇城の城下街として栄えていた。

維新前までは奥平十万石の城下町で、藩士増田宗太郎は倒幕後私塾道成館を設立し、館主渡辺重石丸から剣道などの武芸について教えを受けていた。塾生は百十数名、殆んどが旧士族たちであった。

このたびの戦争について、塾生たちは中津隊を結成し西郷軍に応じて生死を共にすることにした。

中津隊がなぜ西郷軍に従って反政府への挙兵をしたのか。それは桐野利秋が数年前、道成館を訪ねたとき「新政府は廃藩を行って、士族から生活の根底を奪ったのみか、今度は士族の士族たる所以の武力をも取り上げて、百姓たちの泥手にゆだねられてしまった。」と激昂したことが若い旧藩士に影響を与え、明治新政府への不満が爆発したのである。

中津隊が挙兵したのは三月三十一日の真夜中であった。このとき西郷軍は田原坂の合戦で苦戦し、敗色濃い状態にあった。そんな時に敢えて西郷軍に応じたのは、前述の通り西郷軍に殉ずる覚悟だったと思われる。

増田宗太郎以下、中津隊の隊員が死を決

ていたこと、彼等の挙兵が私利私慾を離れた大義明文の挙兵だったことは確実で、事実彼等は最後まで西郷に従い美事に戦死している。

五月中旬、熊本から宮崎へ退却してきた西郷軍の一隊が、北上して大分県に侵入してくる。大分から瀬戸内海を通過して東上しようという、苦しまぎれの作戦だったらしい。薩軍が豊後へ攻め込むのは、大友宗麟時代の天正十四年(一五八六)以来、三百九十一年ぶりのことだった。

西郷軍は宇目町の重岡を襲い、竹田・臼杵へと進撃する。臼杵は豊後水道の一部で、臼杵湾の最奥にあり、遠く四国の愛媛県と向いあっている。永禄年中(十六世紀)、大友義鎮(宗麟)がここに築城して以来、城下町として発達してきた。当時は重臣以下藩士の邸宅が軒を並べていた。天正十四年薩軍が豊後に攻め込んだ時、大友宗麟は臼杵城(丹生島城)に籠り、大砲をぶっ放して最後まで抵抗した。その抵抗精神が重臣や藩士たちに受け継がれていた。

早くも西郷軍は臼杵に進撃して来るという噂に、旧士族たちが町と町民を守るために、自発的に臼杵隊を結成した。

六月一日、薩軍約三千が臼杵城下に攻め込んだ。守る臼杵隊は八百人、折から雷雨の中で壮絶な白兵戦が展開されたが、多勢に無勢、臼杵隊は城内に退き一旦は籠城したが、再挙を期して四散した。この戦いで臼杵隊の死者は四十三人、旧臼杵藩士たちは薩軍の襲来に

対して、一致団結、よく戦った。中津隊と臼杵隊、性格は全く違うが、互いに生命をかけて一途信念を貫ぬき通そうとした点は共通しているのである。



若葉の美

去る四月三十日、日本琵琶楽協会関西支部の総会が嵐山で開催され、私も出席することになった。嵐山の風景には親しみをもち、史蹟の所々をも訪ねているが、ことしも若葉の嵐山に接したい心があった。

バスが嵐山に近づくと、清流が見え、早くも若葉の香りがやってくる。バスを下りて渡月橋の欄干に寄りかかり、まず嵐山の全容を眺めた。

若葉に変わった姿、それは萌え出たばかりのみずみずしい葉の薄緑が盛り上がりつつ見える。神秋と言おうか、葉末の樹々は陽ざしを受けて微風に揺れながら迫ってくる。花の美は過ぎて行ったが、ほんとうに花に劣らない美しさがある。

蕪村はすでにその若葉の美しさを句境に表わしている。 谷路行く人は小さき若葉かな

神武館道場発表会に

山畑を小雨晴れゆくわか葉かな
やどり木の目を覚ましたる若葉哉
夜走りの帆に有明けてわか葉かな
たかどのの灯影にしむむ若葉哉

「ある日、とつぜん若葉の美を発見し、
蕪村に教えられているのである。それほど花
ではなく、葉の美しさが美のなかに沈んでお
り、美のなかにかくれている。だから若葉は
いつも、不意にその美をあらわにする。人は
ある瞬間、いきなりその美に襲われるのだ。」
と。私はくり返し読んだ。

やがて青黒く茂る若葉であるが、私も嵐山
の若葉の美しさに心捉えられ、この美しさを
看過ごさない一日であった。

この日、この美しさを見て感動されたのは
若葉に包まれた嵯峨嵐山を散策した多くの人
々であると思った。

(鴨水)

寸言(40)

頼山陽 「日本外史」をはじめ
め幾多の著書や漢詩
などで有名な儒学者。天保三年
(一八三二)九月、五十五才で死ぬまで
の晩年を過ごした京都鴨川沿い丸太町上
ルの書齋跡に「山紫水明処」の額が残る
が、今は円山長楽寺墓地から「水紫山明」
を嘆息しているのではなからうか。

三位研修同志会五月例会

五月十四日(日)昼一時三鷹市上連雀公会堂。
門琵琶・伴流謡切第七弾法一錦幽、鼓城、錦
道、敦盛(二)一坂本錦道、大賢門一佐藤湘春、
小曲本能寺一山崎錦幽、薄陽江(下)一八束一峰、
五月雨詩一中村晃憲、滝口入道一伊集院鼓
城、千手の前一軽部岳瑞、白虎隊一清水源城、
彰義隊一大富士岳、西郷隆盛一伊藤警水、
台湾入一田戸桜丸、武蔵野一西村晃峻。

晴風会演奏会

復活二十二回記念演奏会を五月十五日(月)夕
六時東京新宿の安田生命ホールで開催(会長
晴風氏)(千五百円)。五条橋一佐藤、竹内、
絃若林晴波、伊豆の御難一諸遊清風、大関英
子、大田尾桜風、中山礼風、月下の陣一山崎
典水、薄陽江一緒方晴舟、菅公一望月啞江、
天目山一野口峻水、本橋錦颯、福島脹水、吟
本能寺一中村晴声、雪晴れ一谷暉水、敦盛一
高田栄水、杉山雅俊、河中山一岩崎電風、山
下晴楓、実盛一会主浅野晴風。

花保圭水氏入洛歓迎会

京都御所から下鴨神社を経て上加茂神社に
至る延々十キロを巡幸する華麗崇高、京都三
大祭の一つ、恒例の葵まつりが新緑の五月十
五日取り行われ、見物に入洛された浦和市の
錦心流名手花保圭水氏歓迎のため馬場鴨水氏
の斡旋で翌十六日(火)午後京都東山仁王門の本
妙寺に馬場、早川、牧水、平井、春嶺、

大阪琵琶同好会の活躍

① 五月三日(日)大和久米寺恒例会式が行わ
れ伏見の吹雪一馬野、湊川一多和、石重丸一
作花旭友、神崎与五郎、光旭仙、五条橋一辻
旭城、姫ゆりの塔一石橋旭嶺、恩誓の彼方へ
一木村蓮水、宮本武蔵一田中敷水、井伊大老
一天津八千代諸氏演奏の外詩吟舞、尺八、奇
術などで参詣者を喜ばせた。

② 後白河法皇を祭神とする京都新日吉神
宮の神幸祭に招きを受け五月十四日(日)昼一時
から二〇三高地一辻、名残りの緒琴一石橋、
戦艦大和一田中、修善寺物語一天津、秋風故
郷の山一中島旭穂諸氏が献奏して賑った。同
神宮は我国創始期に国土を拓き産業開発、酒
造、医薬の業を始められた神として、又縁結
びの神様として全国的に有名である。

各流派琵琶合同演奏会

六月四日(日)正午京都東山安井神社比羅宮
会館、主催京都琵琶協会(会長平井春嶺氏)。
会員の外西宮、大阪の名匠二人ゲスト出演。
昨夜来の降雨が当日も終日降ったり止んだり
で聴衆の入り心が心配されたが案じるより産む
が安しで開演前既に十数人の入場者があり二
時過ぎには会場係が整理に汗を流すという満
員の盛況で四時半の終演後も名残り惜しそら
に立とうとしない人が多く成功を収めた。衣
川一細川旭穂、戦艦大和一一坊寺旭清、北の
庄一桜井旭富、湖水渡り一山岡旭清、小野訓
導一水内媛水、禪師と正宗一安住旭康、桜井
の駅一馬場鴨水、本能寺一牧南水、二〇三高
地一戸田旭公、新撰組一西宮楊嶽水、大楠公
一大阪菅旭香、挨拶、祝電披露、道成寺一植
村真水、隅田川一矢吹旭美津、常陸丸一平井
春嶺、小栗栖一梅原原海、病気等で欠演野田
珍水、荒木旭媛、木下皇水、林田旭城の四氏。

土橋虎水叙勳記念名流大会

六月四日(日)昼一時半横須賀市文化会館、主
催虎水後援会、後援四絃富士会外。花売翁一
前田秋声、須磨の浦風一阿部久子、吹雪の敵
一輝錦凌、大高源吾一都錦穂、木村重成、奥
村憲水、菅公一久保田型光、羅生門一大坪碧
水、別れの盃一木下村水、那須与市一今井旭
柳、乃木大将一森捧水、竜の口一小保内真水、
重衡一末吉希水、川中島掛合一小関香水、
采崎統水、大楠公一若林洋、舟弁慶一鈴木
江水、秋風故郷の山一齊藤旭邑、最廣のツカ
桜一会主土橋虎水、琵琶塚一平野鉦水、明烏
のお吉一石井桑水、本能寺一齊藤殊水、金剛
石一山田幻水、戦艦大和一中谷裏水、花の若
武者一飴谷六水。外に詩舞一。

竹下翠風作品発表演奏会

六月五日(月)夕五時半東京新宿安田生命ホ
ル、主催みどり琵琶本部(会長竹下翠風氏)。
(二千円)。桃太郎一幼年部、春霞一竹下秋
霞、義士の本懐一竹下紫風、舞踊柿本人麿の
長歌及短歌一朗詠竹下翠風、舞踊水木歌寿栄
社中、物語琵琶宮本武蔵一杉山旗水、絃都錦
穂、茨木一中谷裏水、おはなし一金田一春彦
先生、源実朝一会主竹下翠風、短歌舞踊母一
朗詠翠風、舞水木社中、尺八田中栄重。外に
朗詠詩舞剣舞二十九番

六月定期研究会

六月十一日(日)昼一時東京豊島区高三会館、
主催日本琵琶楽協会(五百円)。井伊大老一
都徳鳳、城山一藤間光史、玉藻の前一齊藤旭
芳、坂崎出羽守一岩崎竜風、川中島一清川嵐
舟、接待一山田洲鳳、講評一吉川英史先生。

六月十一日(日)昼一時姫路市元塩町本城能
楽堂、主催姫路組会(会長西川旭操氏)。
再建二十周年記念の演奏会で極めて盛況であ
った。琵琶寿三番叟一天津旭八千代、絃会員
合奏、立方、伽羅の兜一伊藤旭操、青の洞門
一橋本旭司、名槍日本号一会主西川旭操、絃
将、旭孝、旭鳳、立方、曾我兄弟一竜場旭
鳳、絃旭操、旭将、旭孝、旭璋、立方、椎葉
情緒一大西旭恵、絃旭操、旭璋、立方、吉野
山懐古一川崎旭海、絃旭昇、旭暢、旭将、旭
好、立方、坂崎出羽守一谷口旭孝、絃旭操、
羅生門一竹本旭将、安宅の関一岡野旭兜、絃
旭操、那須与市一高旗旭光、玉藻の前一田中
旭昇、浜本旭好、小栗栖一梅原旭濤、姫百合
の塔一能勢旭陽、五条橋一岡友旭香、岡本旭
村、絃旭濤、若き敦盛一山田旭晃、絃旭操、

西川旭操六十周年記念演奏会

五月二十二日(日)昼十一時半長崎市民会館文
化ホール、旭操会主催、長崎市教育委員会後
援。日舞剣舞の名匠賛助出演の外関西、福岡
熊本からのゲスト出演等もあり千名収容の大
会場は超満員の盛況を呈した。さくら一旭仙、
旭卓、旭華、旭孝、絃合奏、月に徳一旭晃、
絃旭操、旭園、旭将、立方、あつもり一旭恵、
絃旭操、旭暢、立方、吉野山懐古一旭泉、絃
旭華、立方、秋風故郷の山一旭兜、絃旭操、
旭暢、立方、舞扇鶴ヶ岡一旭峰、旭鳳、絃旭
華、旭鈴、新撰組一旭将、絃旭暢、旭晨、立
方、綱篋一旭卓、旭孝、旭華、絃旭操、旭暢、
旭園、鳴物、若き敦盛一旭光、旭鳳、絃旭八
千代、旭将、立方、名槍日本号一旭仙、絃旭
操、旭八千代、旭園、立方、五條橋一旭章、
絃旭暢、旭園、旭将、立方、琵琶の寿三番叟
一旭八千代、絃合奏、立方、会主挨拶、花束
贈呈、花の白虎隊一会主西川旭操、大楠公一
旭晨、絃旭将、坂崎出羽守一旭八千代、絃旭
操、旭暢、旭孝、立方、坂本竜馬一旭弘、絃旭
羅の兜一旭暢、絃旭園、旭八千代、立方、伽
宅の関一旭園、旭華、民謡一会員一同、とも
え会。